へ13
3162
22

へ13
3162
22

種彦作

白縫譚

廣岡製本

一九重

四十一編下

昭和九年十月二日

種彦作

芳幾畫

白縫譚

父の恩

四拾一編上

種彦作
芳幾画

廣幸梓

四拾一編下

柳下亭傳來 雑譚 一帙四巻 四十壹編

早稲田大学図書館

早稲田大学図書館

倡ゐうなれど青藥ハ空く虚語ふそも其功まことに神の如しと自賛せざれバ不售ど序文ハ此本面白しと感ふ堪ゑ給ふべし書戯作者ハ古来ゑく心裡ゟ随ゐと天狗ゐ化て居る拙著愚作と早下の間ふ述懐を加るに過ざさっそく序文を匆草くおけを本文ゟ粗悪ゐらんと黒人の穿鑿家ハ序ぞゐ読て掬たまふべ

多きと聞けど又小姐や童癡ハ序の半張ふ目ゐ觸るゐなゞ宜ゟ劇場ふても脇狂言序幕かゐる見物ハ稀ゐり師も正月の節ハ看ふ比し座禅豆のかゐびる鮮鰕の生漬ゐる誰人ゐそれを喰者あらん繙本の叙文も其如し読者ハゐけまごも塞ぐべくあく緒詞ゐ纔なひき然有とそ能書の麝序の文拙くとゟせめてハ袷套の華飾是貨物ふ花をかざる丹誠ゐるべし

戯作家

東都浅草堀田原 **柳亭種彦**

本賣弘所

深川佐賀町 廣岡屋幸助

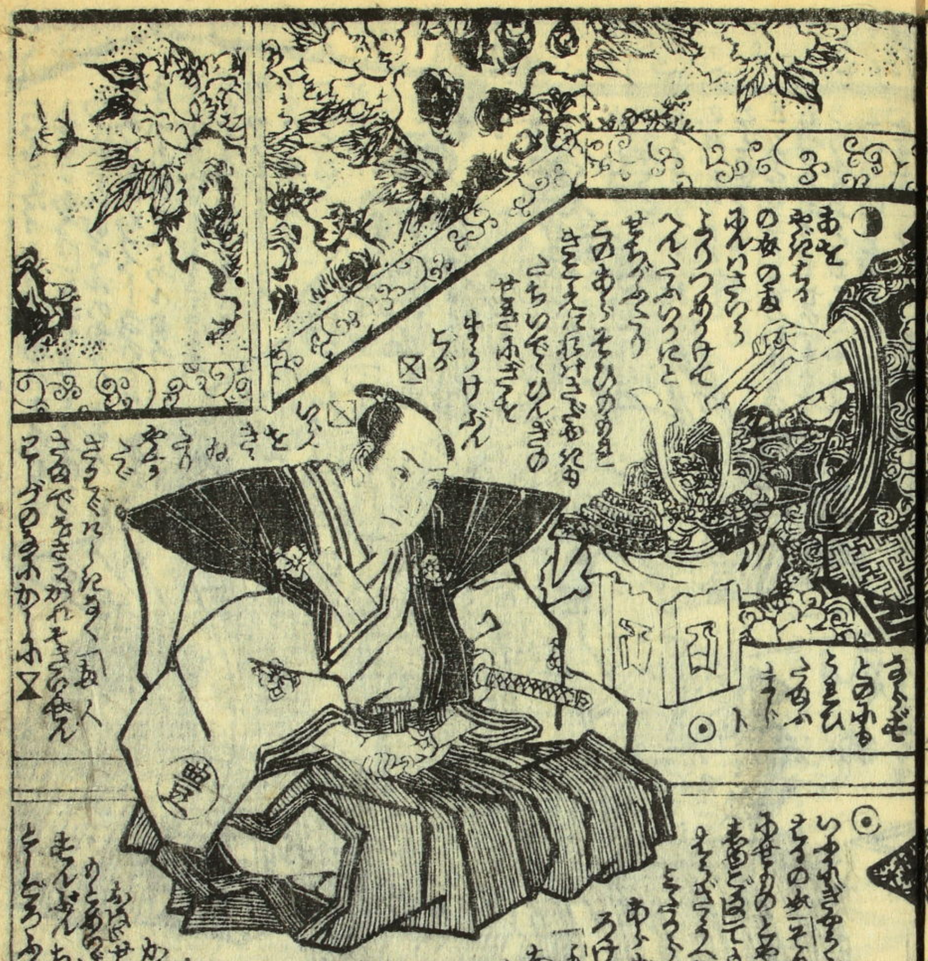
浅草茅町一丁目 恵齋芳幾

同横丁 梅素玄魚

根岸 武田交来

春之助ちの
芙浦ひら
柔揃軒いろ

武


武

【ひだり】ひッこう〳〵ようひのまゑうへ
ゑろりかゝりしろ【そまをそゝのぐ
かゝしうがそんのゆうぬきぞん
のまんてんのかゝすーりのとん
まふあひロとふんあろ
せーうえ〳〵まつまゝ
でかくまををきめざるっ
かろうまろうく〳〵てく
ようーやのつく
ぬりぞひとせんぎ
と

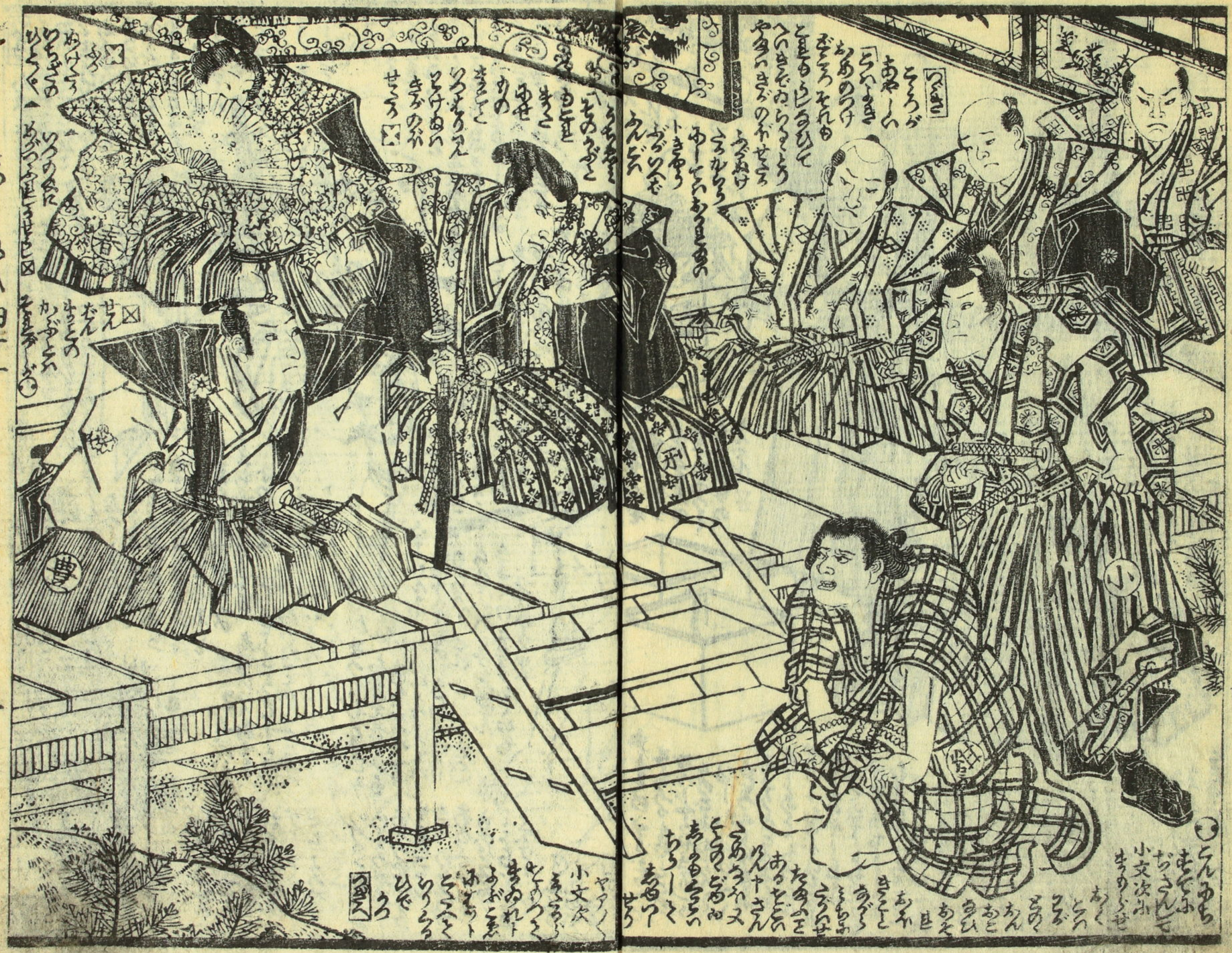
【左ゑ】ひッこう〳〵ようひのまゑうへ
うひさぐふちのゆのありゆれ
まーろ大かぶそもひのみと
ありかぎりまぶろごとくにゆげ
ゆくと二丁もあつうけこれと
つひふゆゆろへをひろうろる
ようーゆくてをちうろるかの
くせかのざうちもそてあ色し
とうそあう小擂ばっあり月に
ゆひしくこてあ月ゲ
そんのひろのゆて
ありてふせいざろうの
うぶとゑあるせりゆひ
とつぶーてひくとこれが
ぬんまーぬあいふぶと
まこのあのへをろかふ
くせかのぶんごろまをを
つけこくぬすとろさ
せーあのあらんきふふ
せあられゆるふあふび
らちまでくあきしざてる
ふりひしそれぞれあつへのざう
うんをちふちのはひろう
せんとありんざうゆへれ
どまろうぞくをまりゆざー
そろうふろうさーしぐまざ
あへつくこの句ふあんろさ
ざひろうぬんぐしとのあ

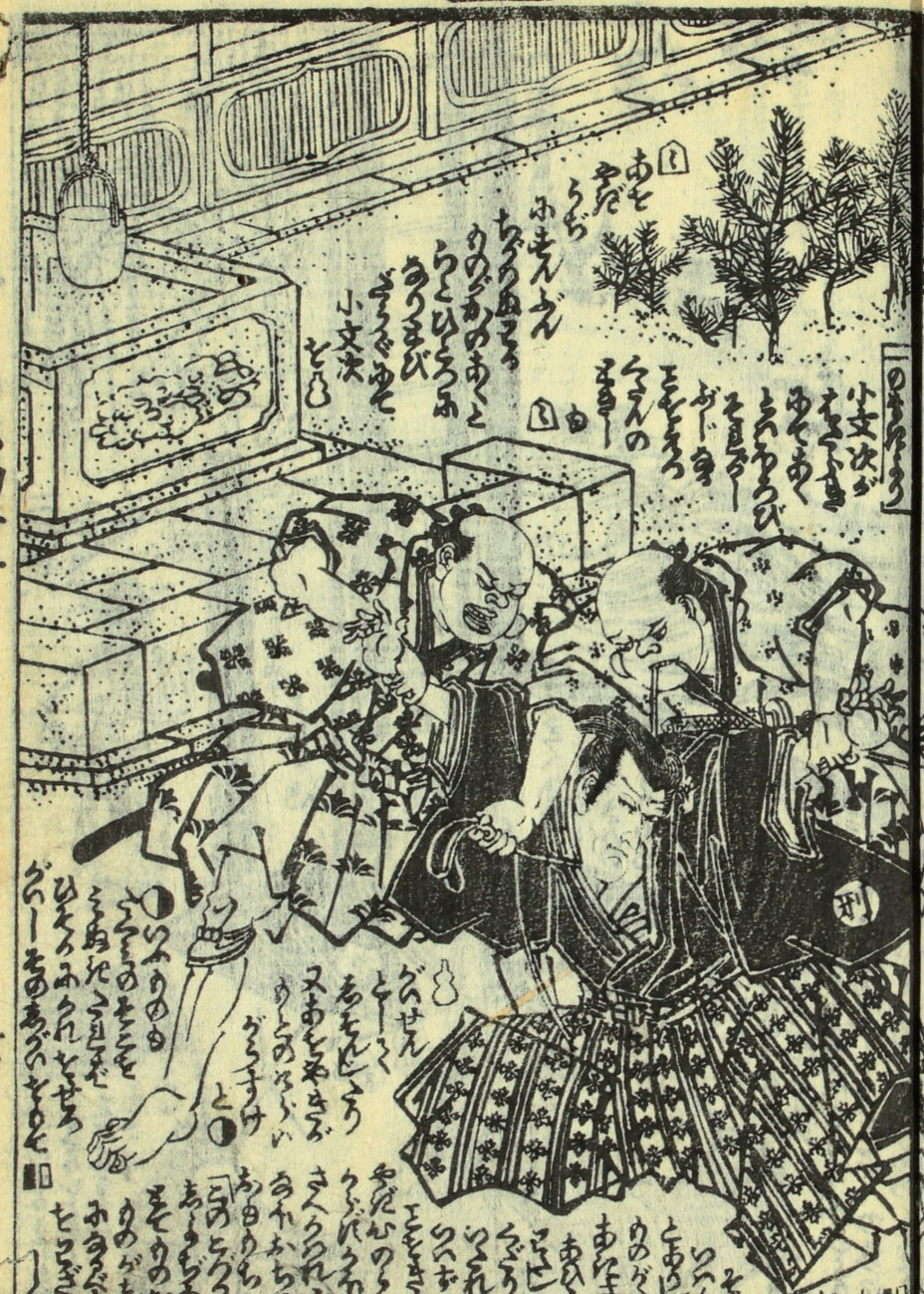
えんちがそんてある
ハトさざ
ゆえあ中をとろるべ

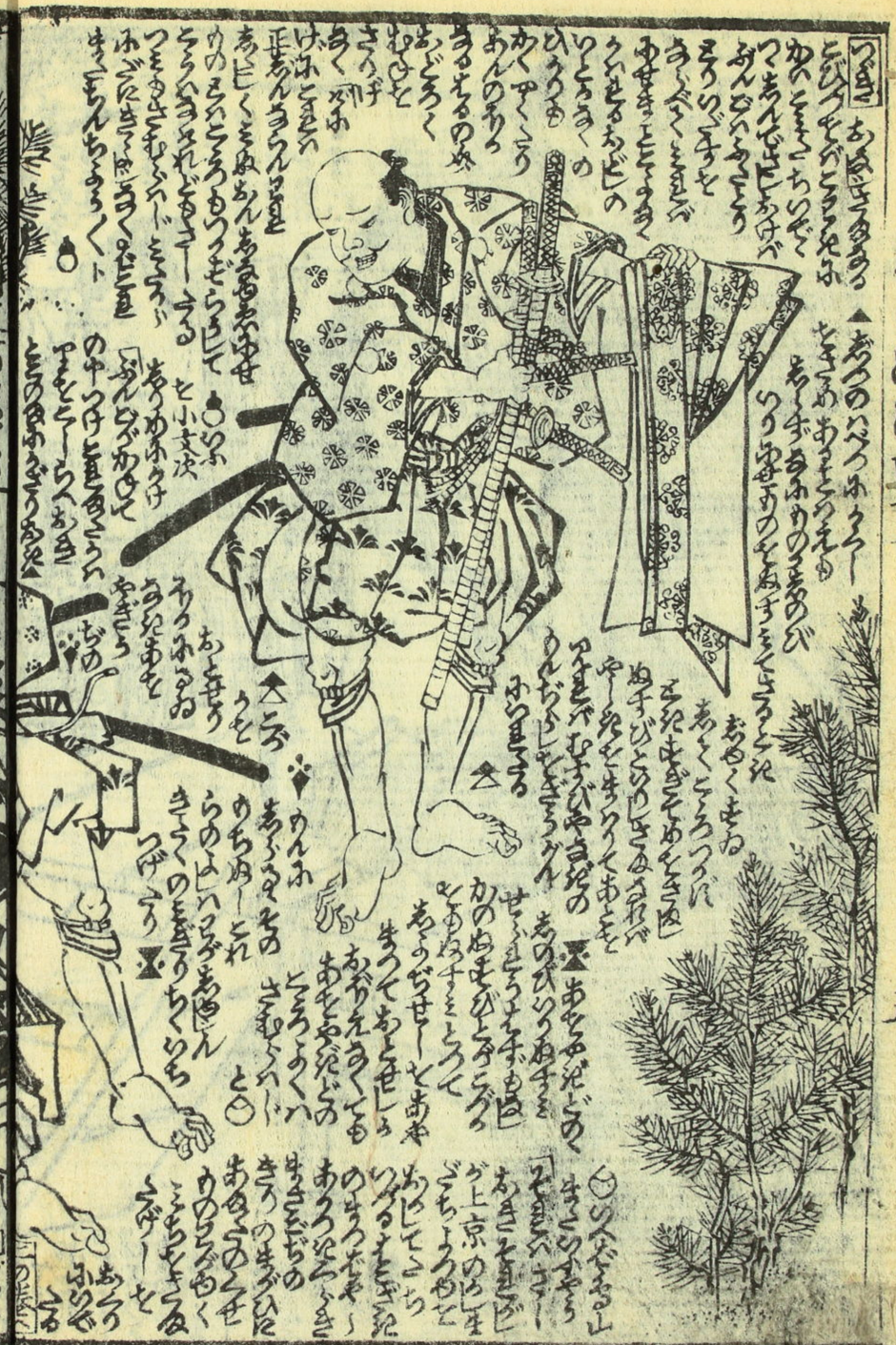
【ゑ】夜七ゑし
さんその巳そのかゝりこそち
ひの川のつゝをそのさゑ
ゑーしそろをりのざうけきろ
ふゆきまひーろえのつ千ぐきこそ
せびばそのゆふ【右へ】

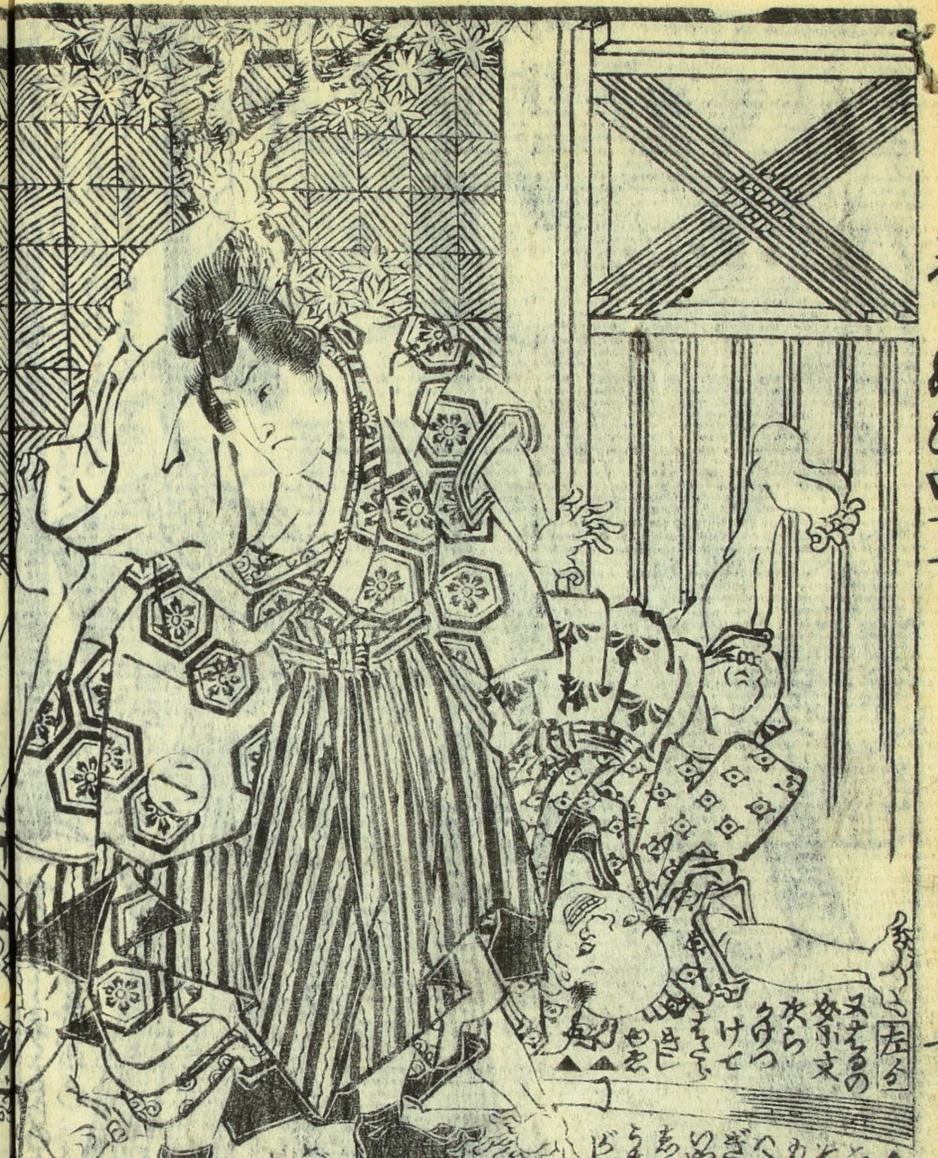
さぶーへのぞ
さうしそろ
えんぐろんのゑろくく
ゑーぐろのえんぐん【ゑ】

おとそのそろぐくを
ろろろるまぐとこのぐんじゆうせきろしがうのぐゆあんぐひーあぐひゆうく
ひろぐんきふみろうとんみちゃーぐあくろろこんぐ
むまろをこるをそぐこ一のゆゆぐんふゆの且まろさんとまろぐをそーらそぐんのふぶとそろうそぐゑんみさしあけがさぐゆひしぐんえゆろきまそのそこまろーゆふせよえらべけんらさろそくつぐんつげろうえうえいぐきふ且ゑくこひーく


豊
刑
小





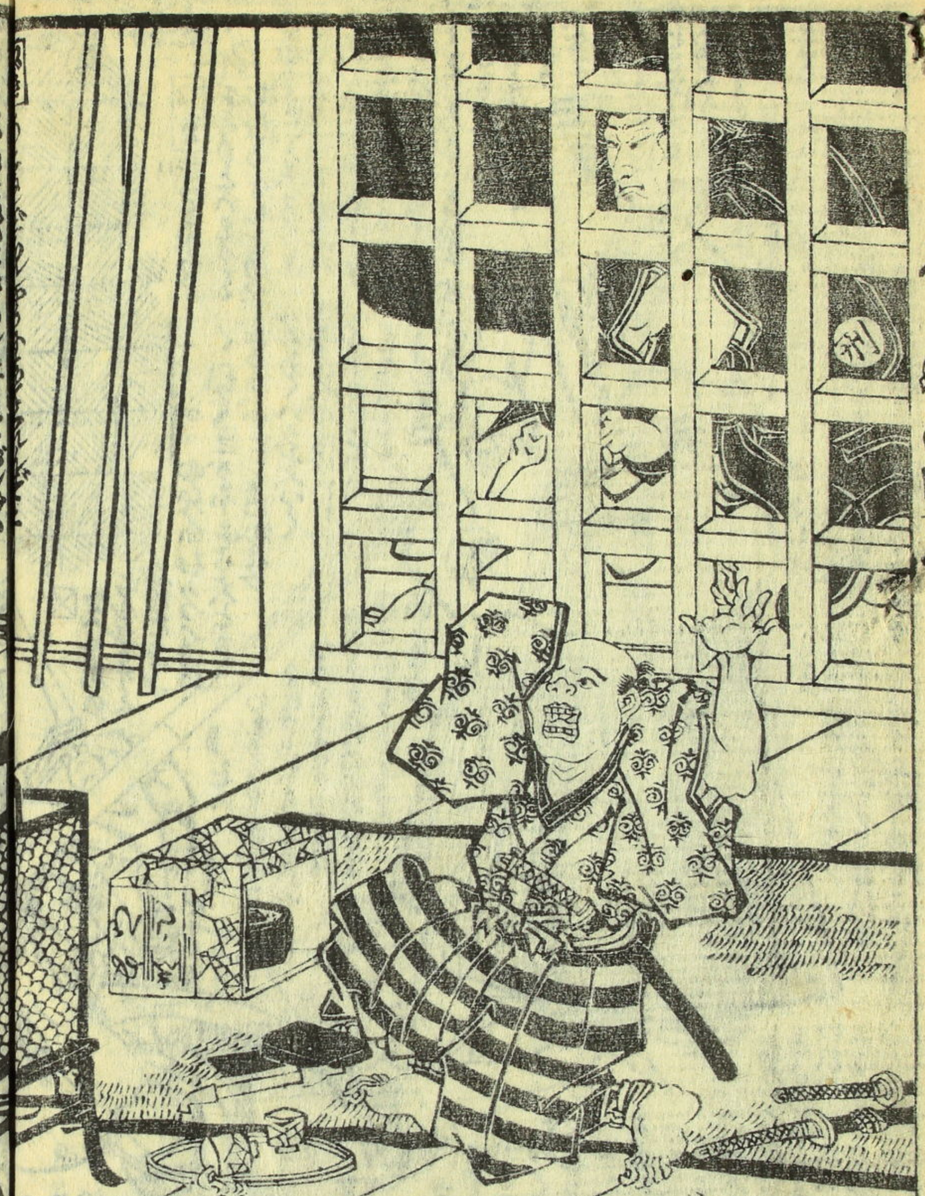


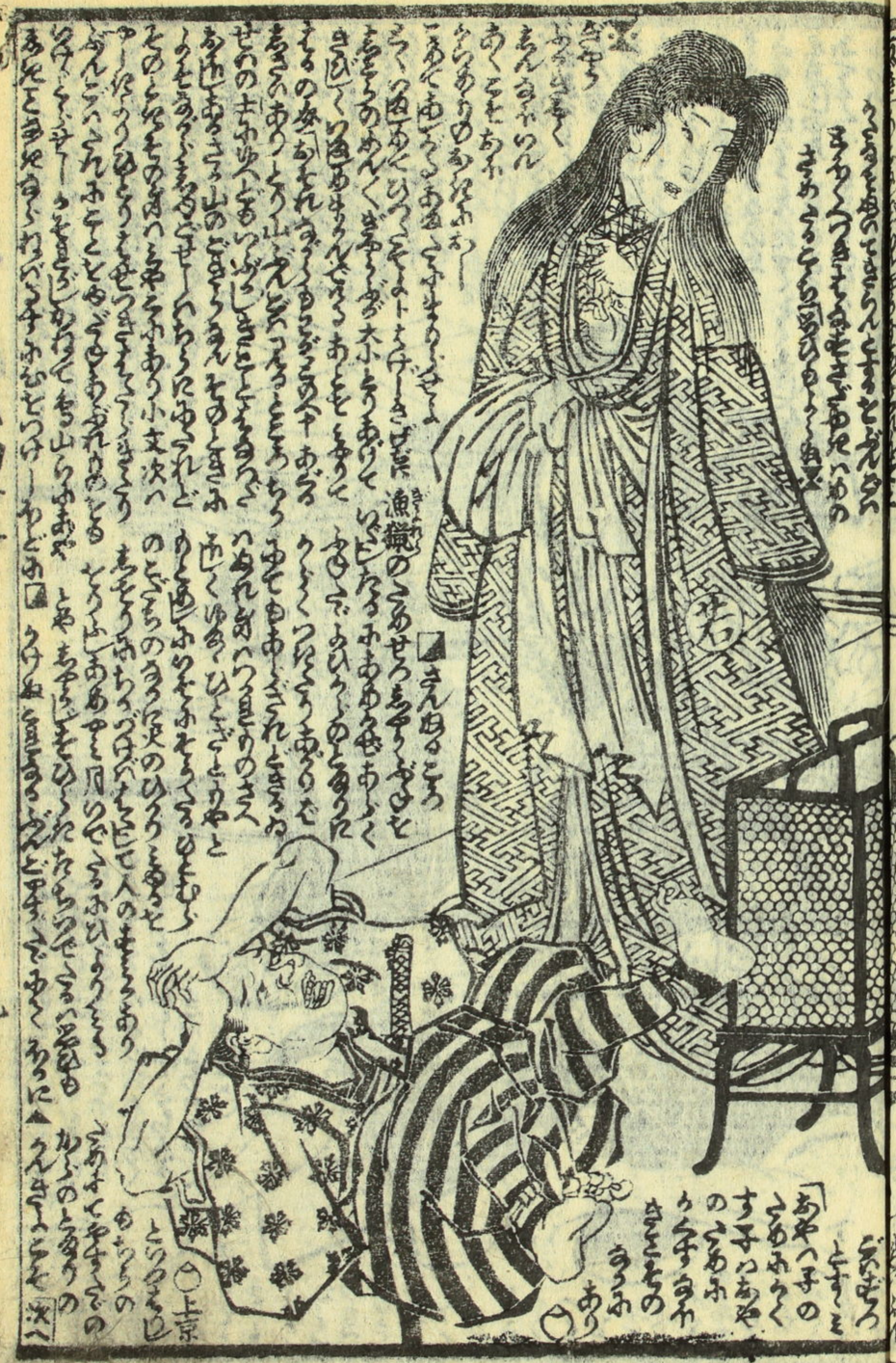
左の
又そるの
次ら
みつ
けて
まさ
きし
ゆみ

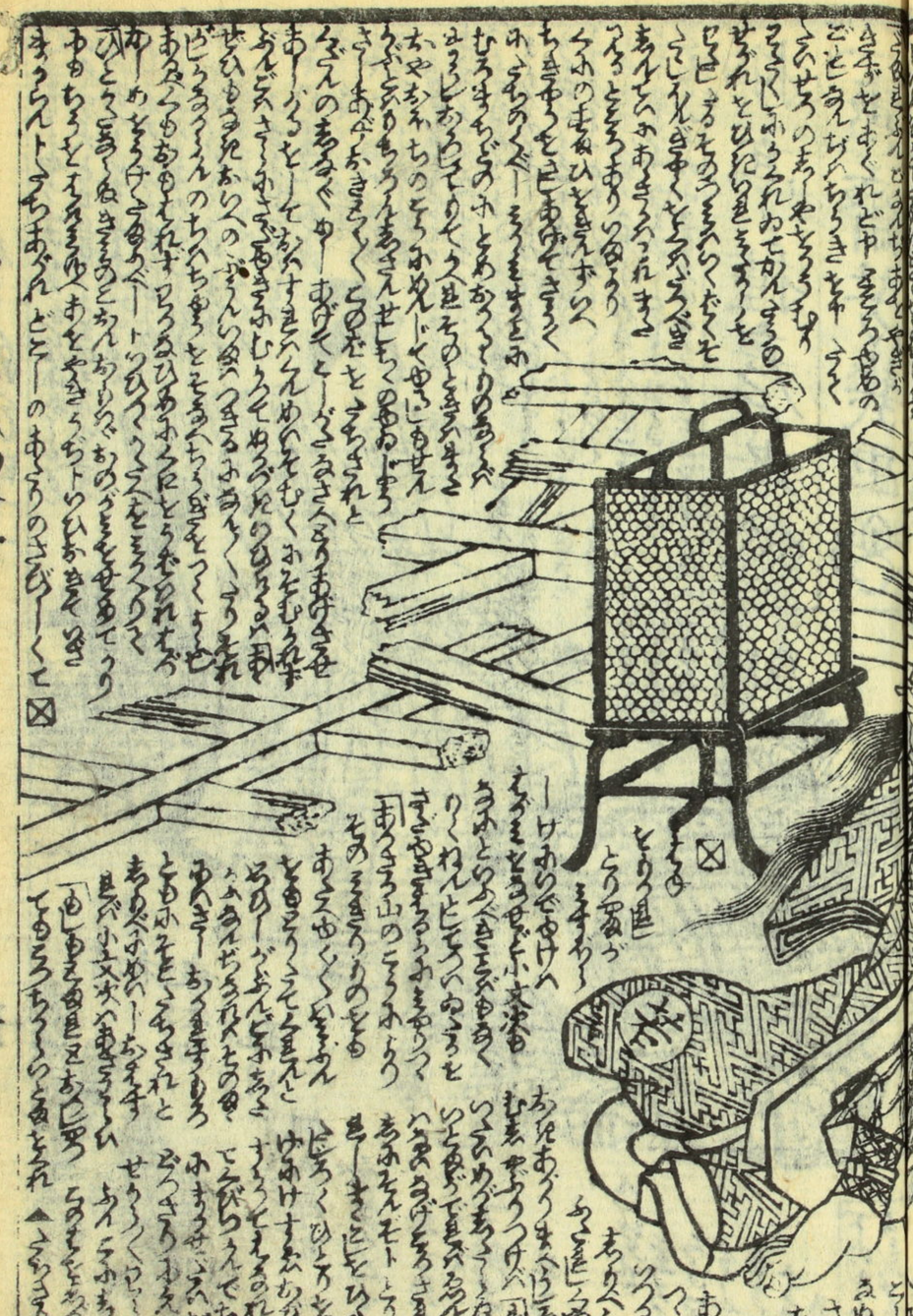
▲つくうも性四さす
とのとうしまうをれこゆいは
そのまをあのあるを
あめのからうやきこと
へんぞとうまこまるる
ぎかうぶむひつくゆそ
いやしきうめのみとのを
あいさをこづくうみと
うそうんおくぐうこと
ビくほをうるるく
しきうかうとと
ぐもおりも
せんとうぶの
ふをれくみを
くそうひそに
ふをきへひそに
つうみてめりの
のこ人をれぶまも
ど一まからせゆけ
ちくるおぶれめの
らをよあねこのけ
どうあれるる
うちっその
こそのの
こうんん
いとれる
きうひ川と

いざ非ひとあるそこのとうろうをくちうきうやもる大とも
そむちうちどのにうんあくいうぜへつく
てんもうりへてまさのさまぶんぬけあすもの
ゆいうぐおがめすもの
きもてもも山をそ
あそこうへさう恩ぶんどう
やとそうふーれべとう。ぜ
のやもう
ろうきうきう
きうんん
そもあべうだ
そまびしがみに
あづろうろうう
とすんぎをこがんと
ひふをぶんどへまそかきて小文次
七五人うのひのとそくつれきされと
いひうくまべやにとあうれトやくく
ゆーつれゆいぐうにあらはそ
ひいひのくいをうち川のでーまう

夜ふりてあくまつあり
まちにあおれのおくまつあり
らそせきそあすうひ山ろうしん

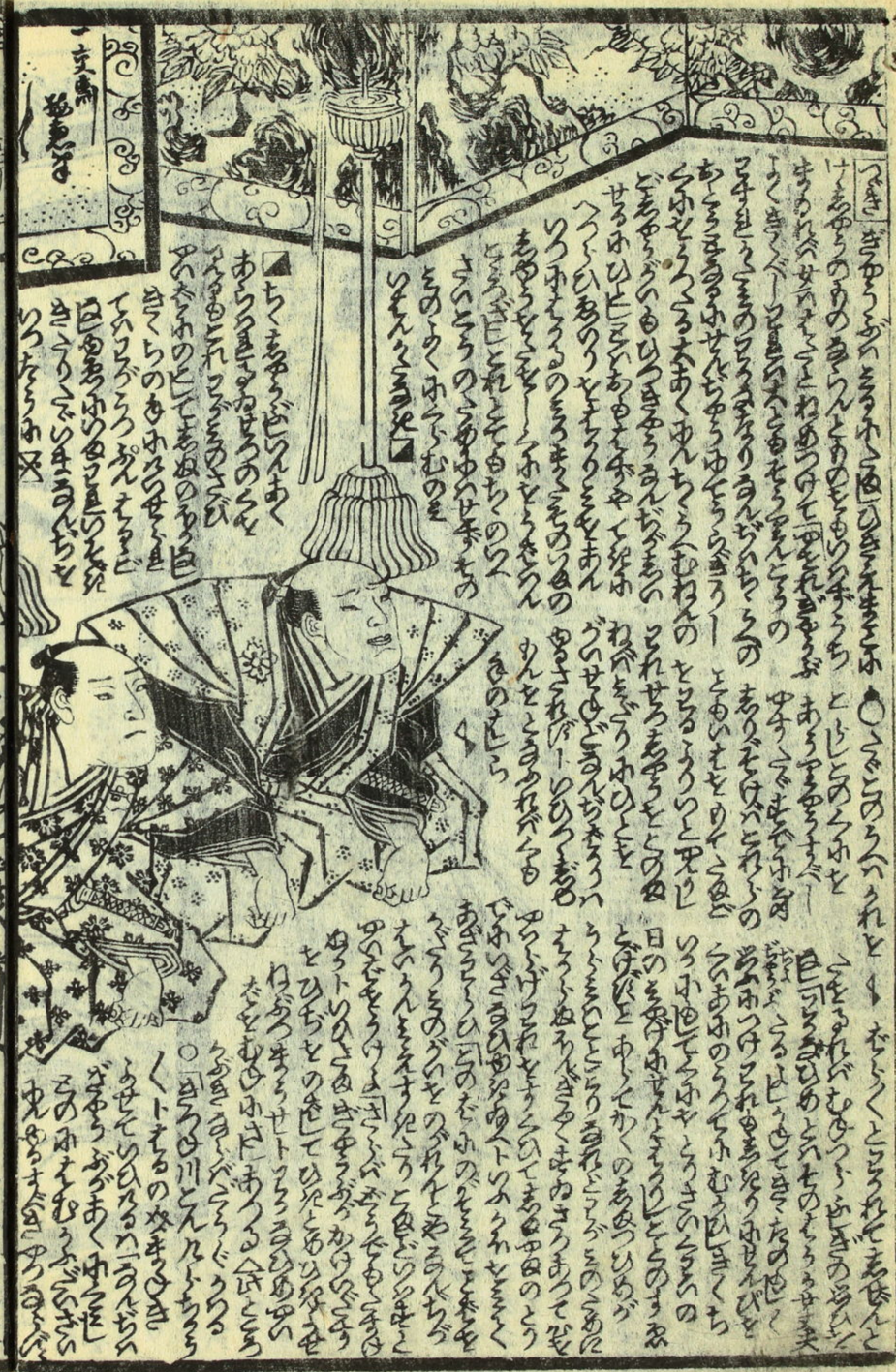




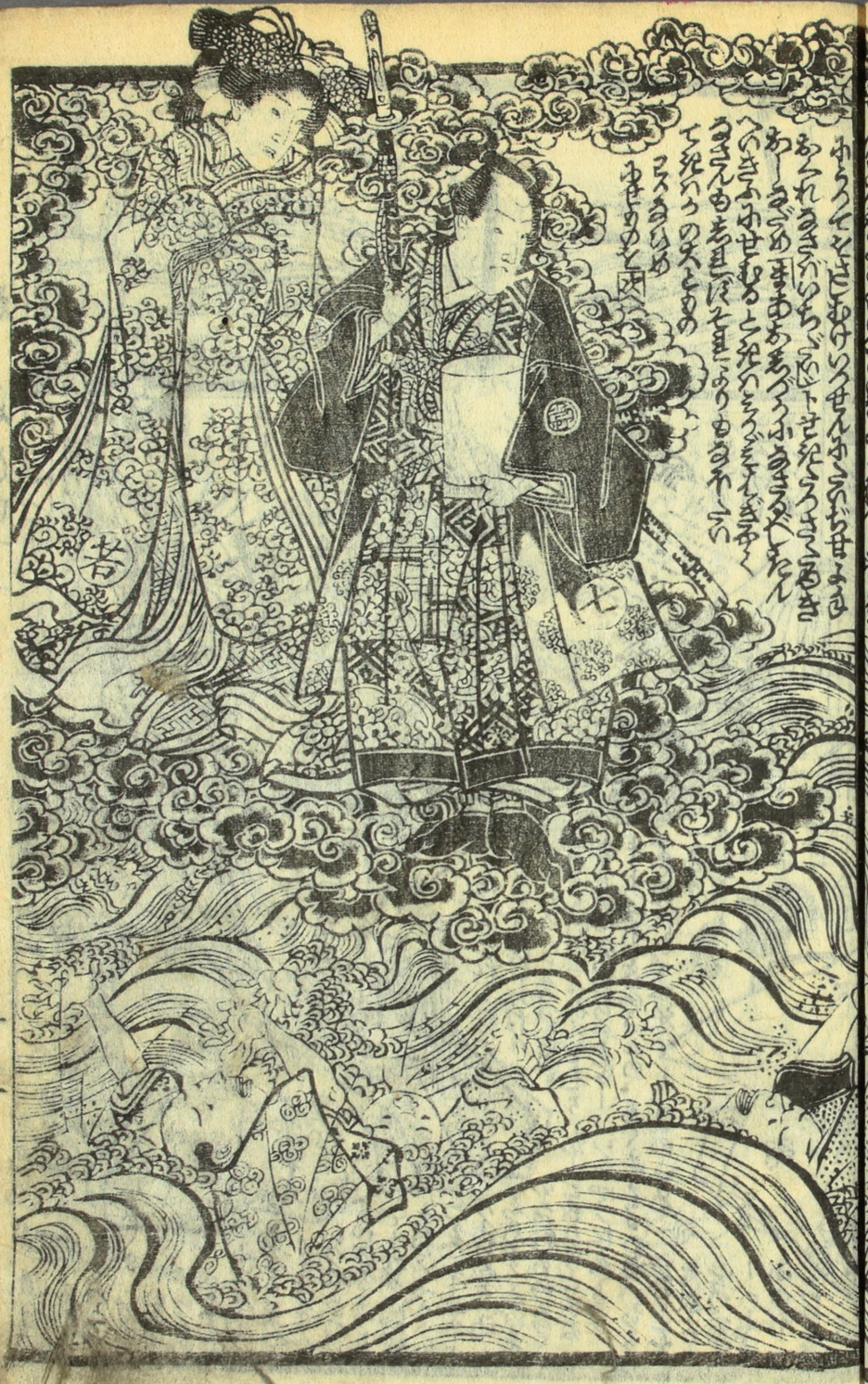


柳亭種彦著

一恵齋芳幾画



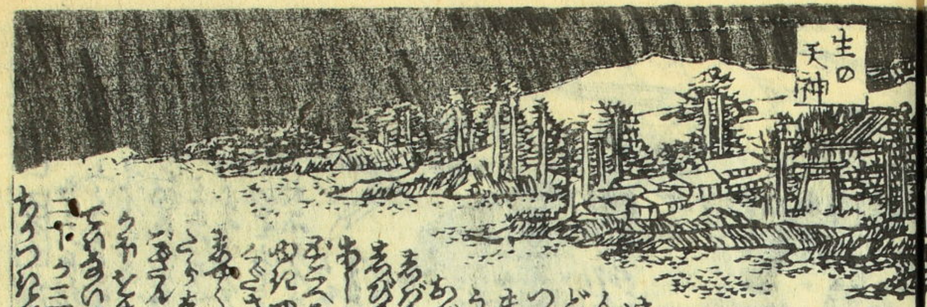
つぎ こうくわとのせんぢん人ちぐひのよろひあるひはうちつれなどしてぐさうりませトつちふまじらをまりあざむうれしがまつすぐそのつえをうちもをれおれにうまうくばかふるでやるさこころうくござりのおのひとろやうろそれいさかうでござりますまことにあづまきーうざりさけぶうのとり山さるきりのくさりのろひつくあくそものこえこひのせめひとこのゆいぶんのやうふるまいものぶまねひおすまやかくさむるさこのつえをもちもまるまるふようくさうくとのやふちをやうくさうくさうくそのやありざくろうざりますまのひとろやあいもやそこ。うくいかせのあり そのあんざうだやこやまうすこやのこれいさうろうこざんばのいろうとてまうそらうんひとうあいろうんけやんのくろひいをくぬざうのいをまざりさんまくぶーのろうとまりけくいろうんりのろとまくぶーのろうとまりけくいろうんりのろ百あやうもてまづけてあるやうすさそこそむれんかさうぬつうようくうんちいそゆんのこうよつこそをるしてこざまやそめつうくもひくくねよとんんふときうそくさすれいばさざるれとまくのまやつをさきに思いばくとり山のとあそろきざまくんあうつあそうせーいきさけかすそくうさうあそくざんのんとろやあとのとこをてくやべーまやゆうろそさにおけいつせんゆうこちせよふあーるざめまあまあまづふきまくべんへのきふかせむるとれのこころざくきくうきんもまるまこばそまこりもれいてれいつのくひめゆきりのそ



三の巻より
五

五

岩


生の天神

種彦作 芳幾画

伊八刀交來書

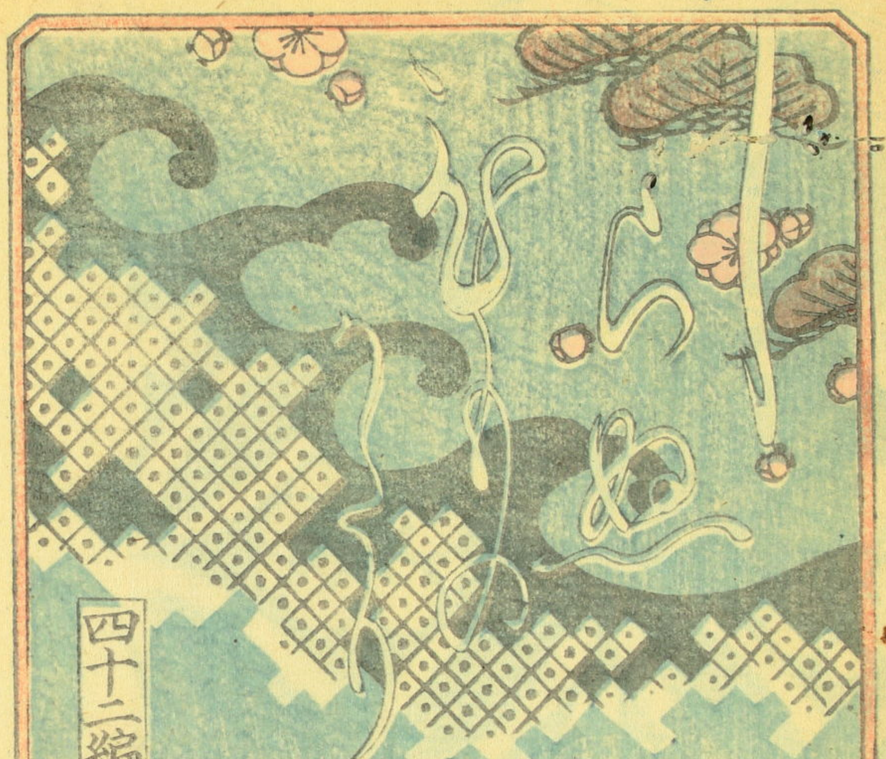
二編合本仕立
つゞき物の方に
ご注文の
節は御一報
下さるべく候

地本草紙問屋深川佐賀町 廣岡屋幸助版

第四郎
若菜姫 忠臣蔵 四十五編 柳亭種彦作
のなか八大傳 四十六編
三十編 諸霞樓芳幾画

十八編 假名垣魯文録
十九編
三十編 諸霞樓芳幾画

柳春秋色櫻 全部 山々亭有人作
恵齋芳幾画



四十二編之上冊

柳亭種彦著

惠齋芳幾畫

甲子新鐫

廣岡屋

白怒比

四拾二編上

物語

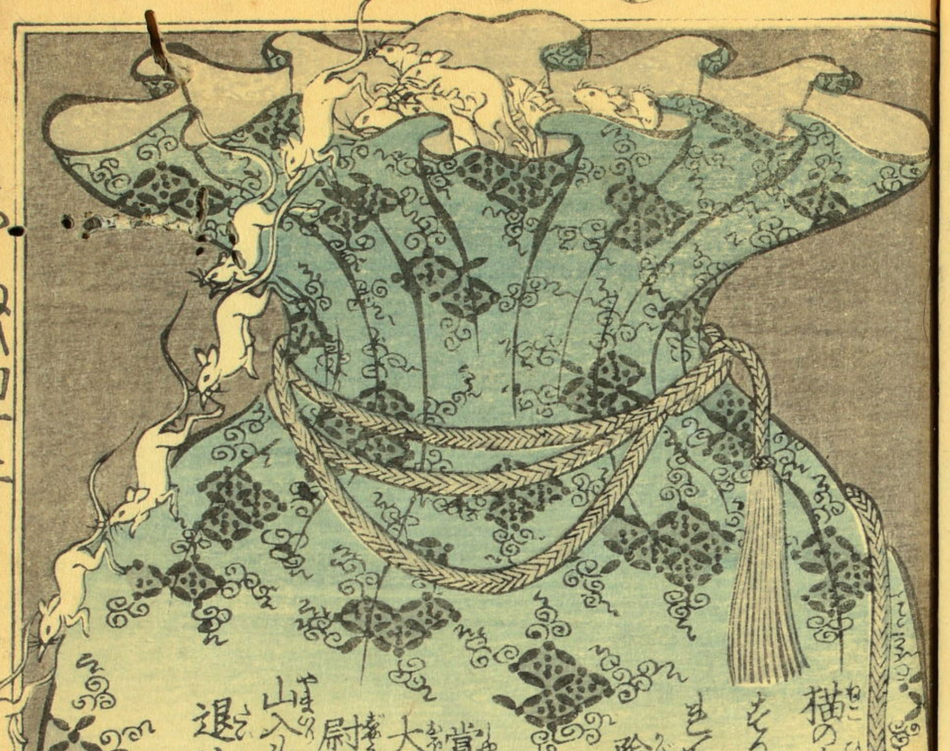
四拾二編下

種彦作

芳幾畫

廣幸

文庫



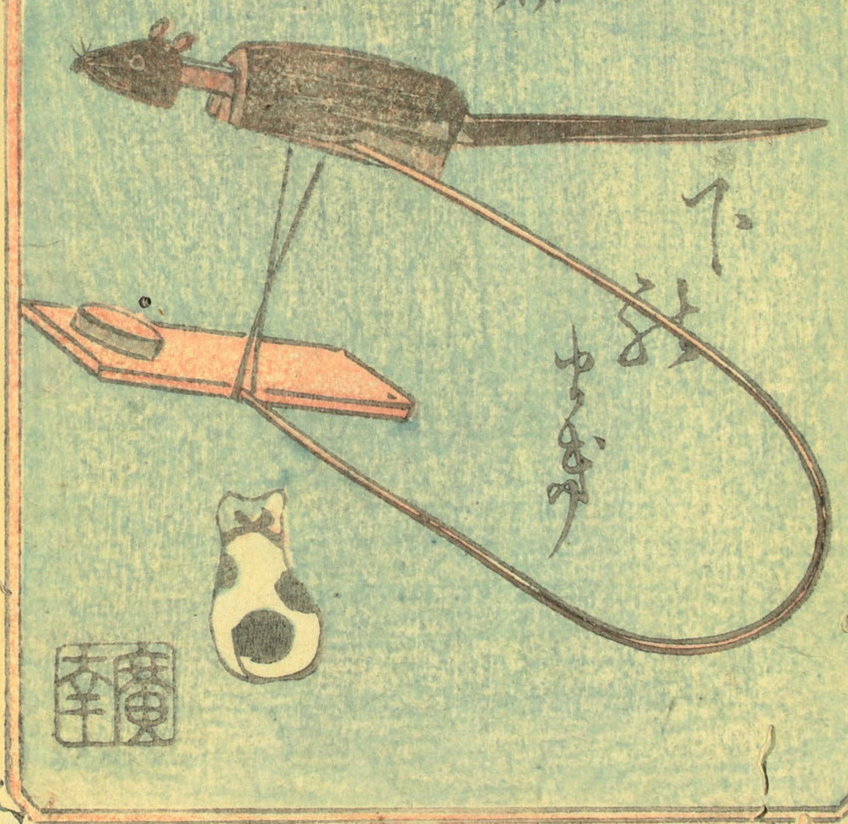
猫の人愛よきを化て人を服し聞疎き鼠の黠智も福神の使しめと思へば器物を毀そこても堪忍をするは寶を欲さの諺まそ立寄が大樹の陰鼠ありの主取るにてまづ猫の物怕をそよ雲泥の懸隔ありと余ごとに鉛筆も壹萬ご續貂又皮元の出精ふ依く他本よりはゝ賞をる人ありとてけば愉快くさまわくば益此編も大當ハ袋の鼠壓さ促織欲だうさ頭上の黒い扇般ご試真毫の三番叟鈴菜鈴代七草四郎ご島山入も程近し飽るまで讀しめくまゝ子奈の猫退治うら順くふ書出べ〳〵

甲子開春　柳亭種彦

化猫譚

四十二篇

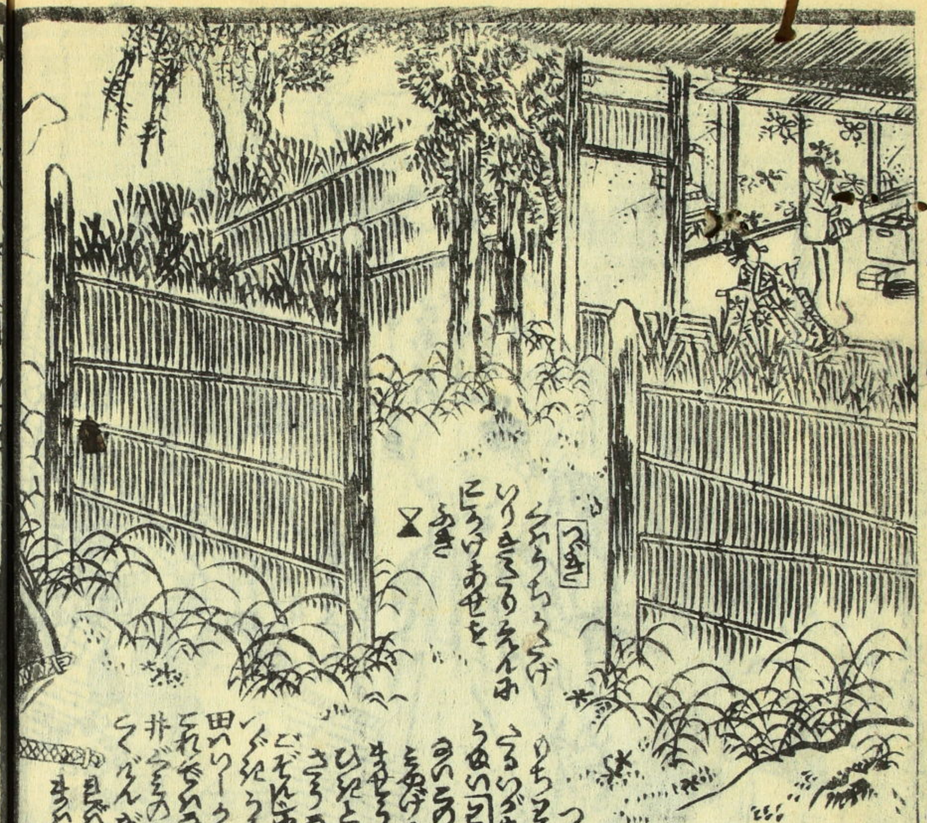
柳亭種彦　著



鳥山秋作照忠

煤作妻照葉

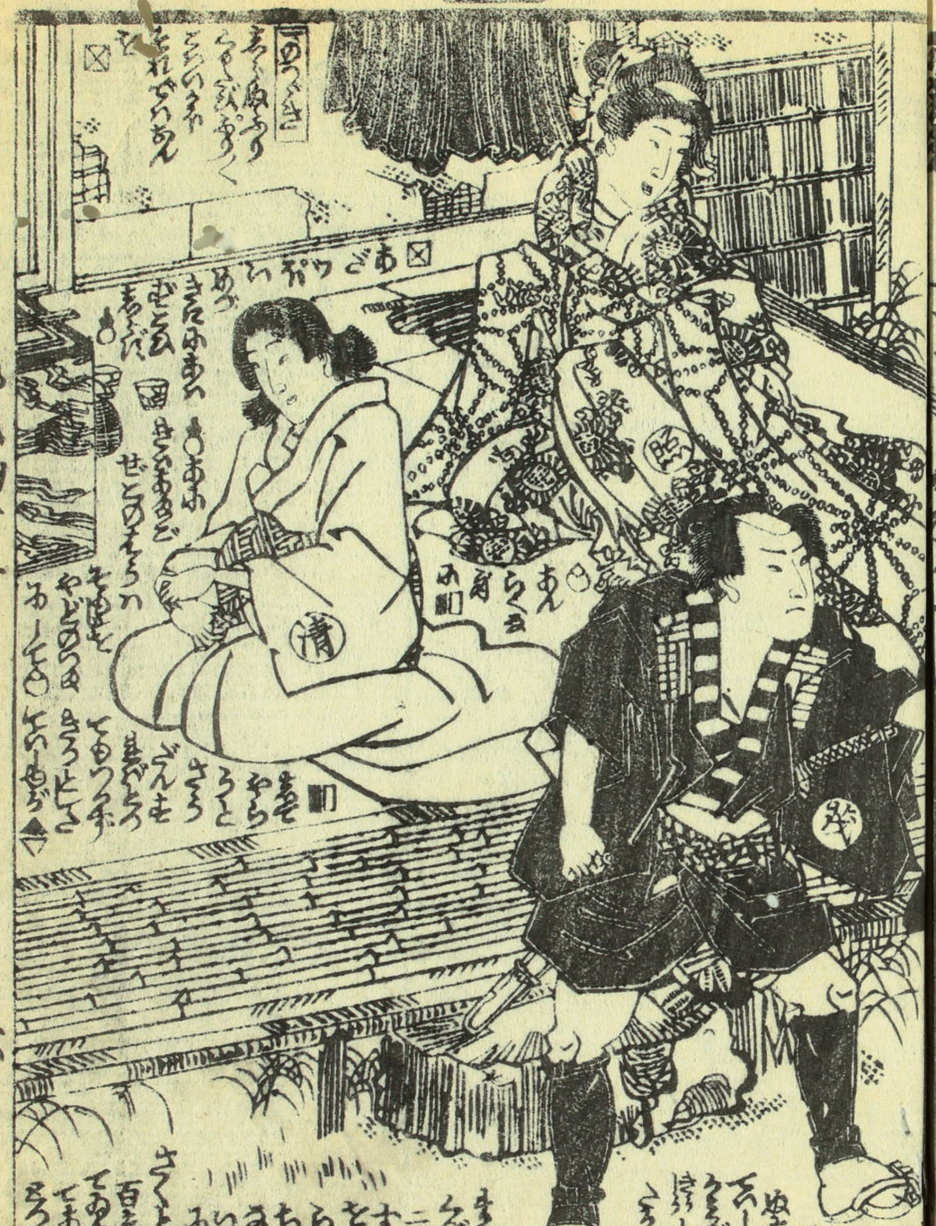
○つ四のさくうりをまろう低と考とべをうりすことひ紀山のふりうのむうゆうおとさそるてりもとあの清光ぎういそは
おくこの日をもうり
ゆろとともうくぬさ
ぐ忌日ぎうりとてきぐうもめーみのつへゆもぐろりのとひとむりあねそゆうぐをうちきびざいとあろうのくふぎつるぐりてりもあうきをのろふまろよをゆぐめあのの名をとうのまくゆんうぐうもむりあんきぐ六ろぐのあろうまのもをらのくぐんせこそれとゆをれぐそのそりうむうの日
まる
正六ろ九八大

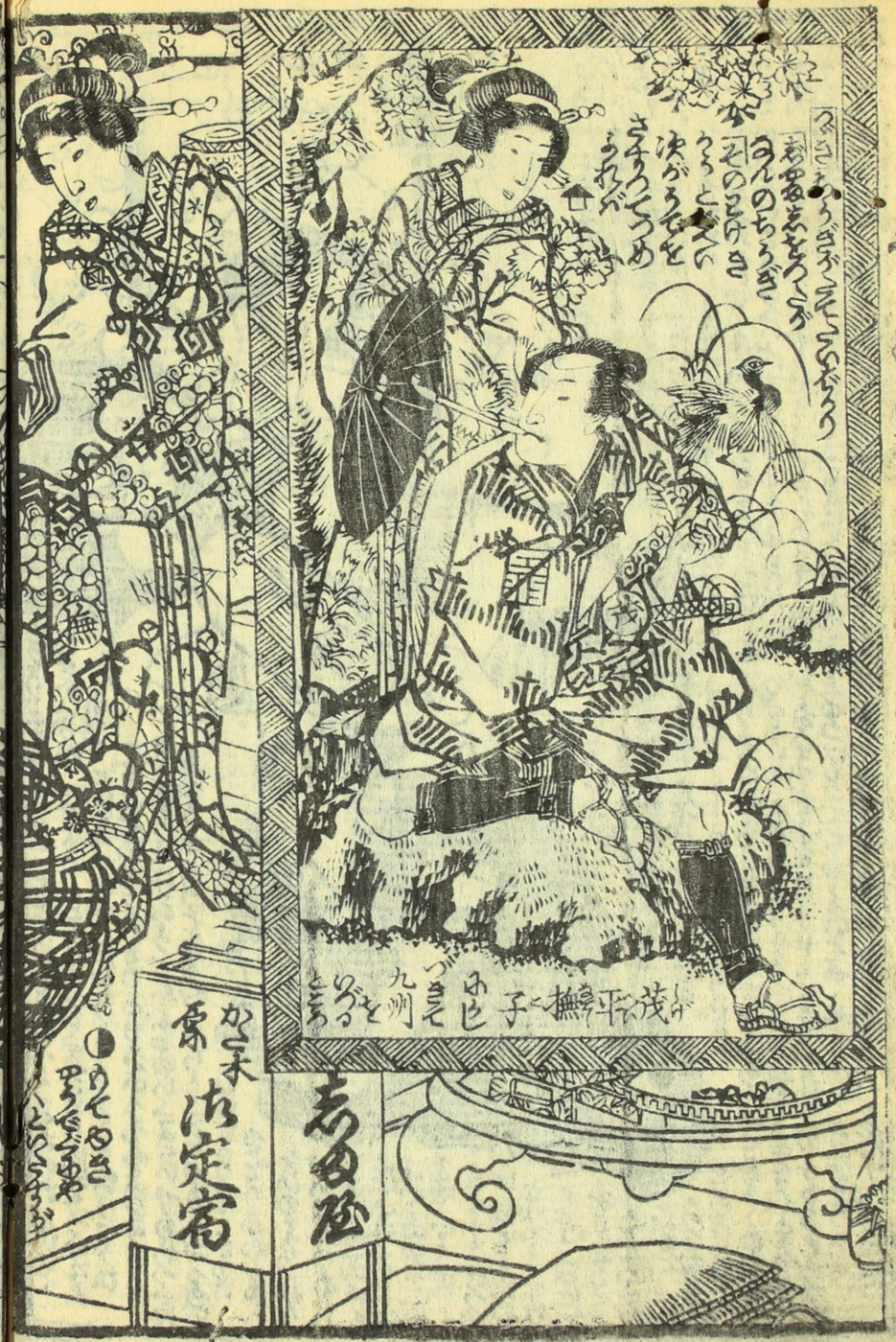


【つぎ】
こうらうらうこげ
りりさくりそれいお
にろうひあせを
ふき
⧗

【左ページ】こうりのやうね▼そでをのいとところの
かをそりとかぐそと　あせをきうつくその下に
いつもよりふひをちの　あるをあけありのそば
うふうふすれて　もてんろのうれあめら
あいてあごひんとる　ふくれとんこうとも
そそをきるところ　ふるうとこのごろちう
トいひくてりちが　のそろあ〳〵そひきちが
小ぢめうおこ「さア　ひのやうでござるてや
おちやうみとさー　「まアそのうへをもると
いざせ〳〵四六八はと」を　けのエはそもあれず
つけうりのふしいろぐん　この四六がおうアどのく
りもうまちふうこちゆいろ　ふりひんあくいやかうアど
うるいざまろざをそでや　もがうろあうて百ホんん
うぬの「ろー」いむざくろのでる　んをとるとやよお四ごや
ののろのうりのうらうてござのの　ござ」ホまうろうあホ四せう
とあげれ「そんろー」のをそへ　せいまろうろうあホ四せう
ホをそうのー」とのへおこそう　トいふとれまんとう
ひんとやー」せにちござまを　うちをさめミンおの四て
さうろおひさるゆいうく　せのうろうホありるホ
ござんホ「ほあひさりのてう　あうれのいにとホー」ート二
〳〵ぐれうあうけ〳〵ろへいる　うふむうひあーやくをまれ
田いり〳〵ろけのやうホひこれる　いまれ八はとさー」あれ
これそんろうホとさろ必ち　「そあるこれうのめの日う
井ごろのむ〳〵ろうつみの　ぞうのちのごちそうに
ろ〳〵んぎりの用水おねを　必ひうろ〳〵あんまー」
見ぐろうろんうるあをを　おろといへおひさあいろ
ホうのさ　ろおそうり▼　そのとのホあろうろう
```

【右ページ】
ろうろうろうろうろ
ろうでろうろうれど
あくあぶうあ
【右ハ】
ちやがめう
ちちちちう
ろうこちらへいりござうま
ろうろうろうろうろうろ
の自ま
すまの
あろへのとき
いや兵
ろうろうろうろうろ
ろうろうろうろうろ
ろうろうろうろうろ
```




ゆうぎりそこそこそろそろ
あまをとをくくる
ほんのちょうぎ
「そのてびき
うつとんでの
決ぶうそを
さそうつてつめ
うれば
茂平
撫子
九州
かさま
原
法定宿
吉田屋

貴恵
八幡屋
この二十八年内ぶむじ
がうりあげ年とびひー
とびのうそをそのうそえ
をこそおもうらす
ゆうぎりと末こ
ふそろの
女ちうも
けでもござ
ちうの
ゆうぎりそこそこそろそろ
ひとのをう内ぶむじ
そうやうちうあり
けどうろうおもうせ
うさされうろうどき
あとにてあんせやをうと
いうおてうそうそうえとと
「あくやじ」とうらいあんがで
も「このとおろうのおもじ
うさそこそこそろそろ
あるかうろともおとうをうれば
そう内が「うえ」おもうの千ずおのさ
まやじ」どんうさそこのとうが
おうそそぎとぎうろう」つぎえ

清

戯作者 柳亭種彦述

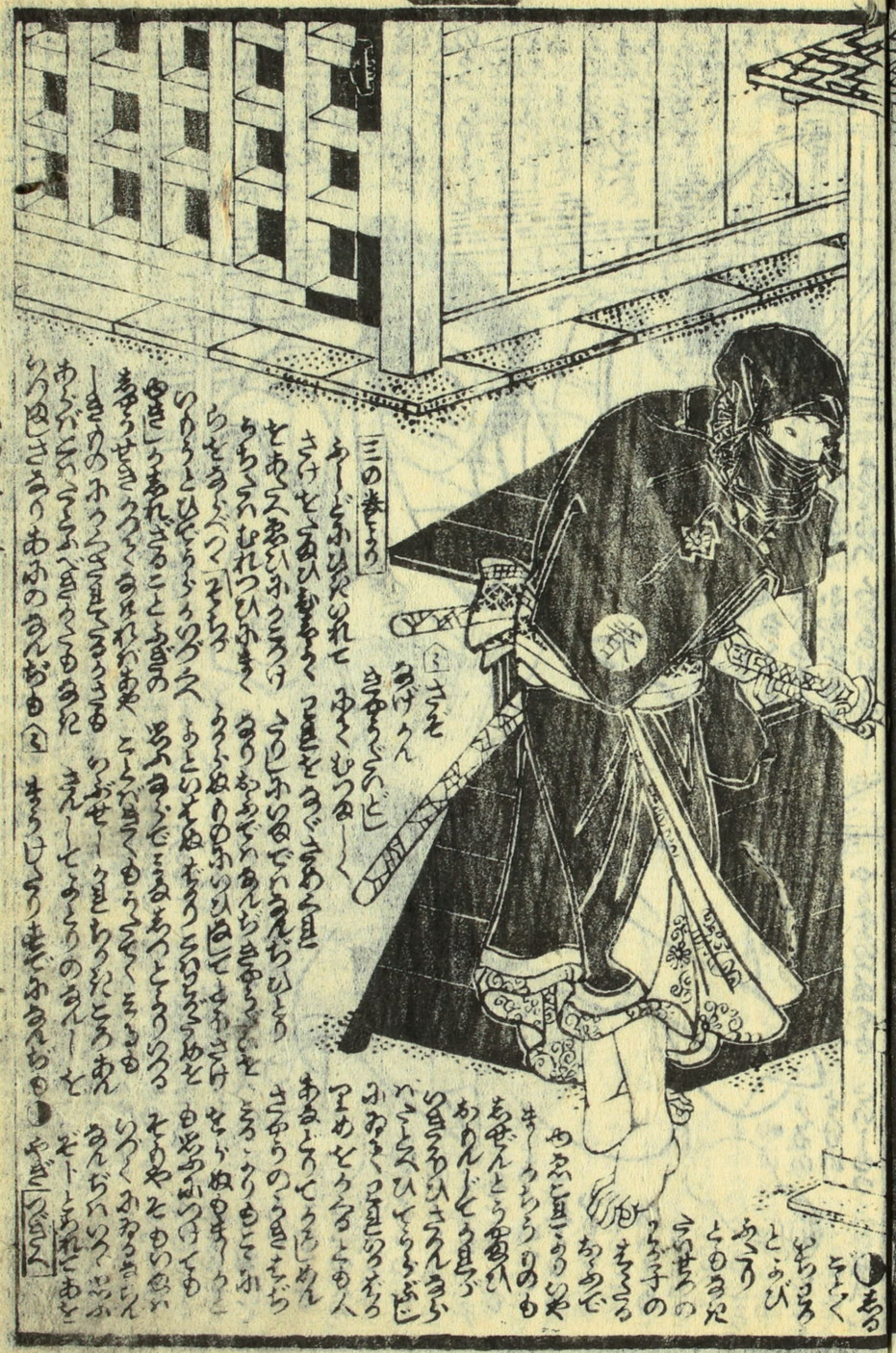
浮世繪師 一恵齋芳幾畫

[つゞき]ごらんくださいまし」のっかゝるべき句をのこゞ月さんとこゝをⅩあるいはそんなふうにでも句げうのうそのゆうれいのごとくあけやうにてあれとさまけべどもちっくゝみもうせそらごとをれくくうきひめ「それあとあとのそごさんすのごとくせひかるよ」トそうろうさうろうさうろうとおもひどうろうとおもひさまをもせうろうさんト　あゝこゝろぞあやまりのうちにんぶりとるとこゝろまうろうとおもひさまをもせうろうさまあゝこゝろぞあやまりのうちにんぶりとるうらねむるこゝろ「月ばき」のうつまりみつのごきつてもまのうふのうろにひとふいあゝぬ

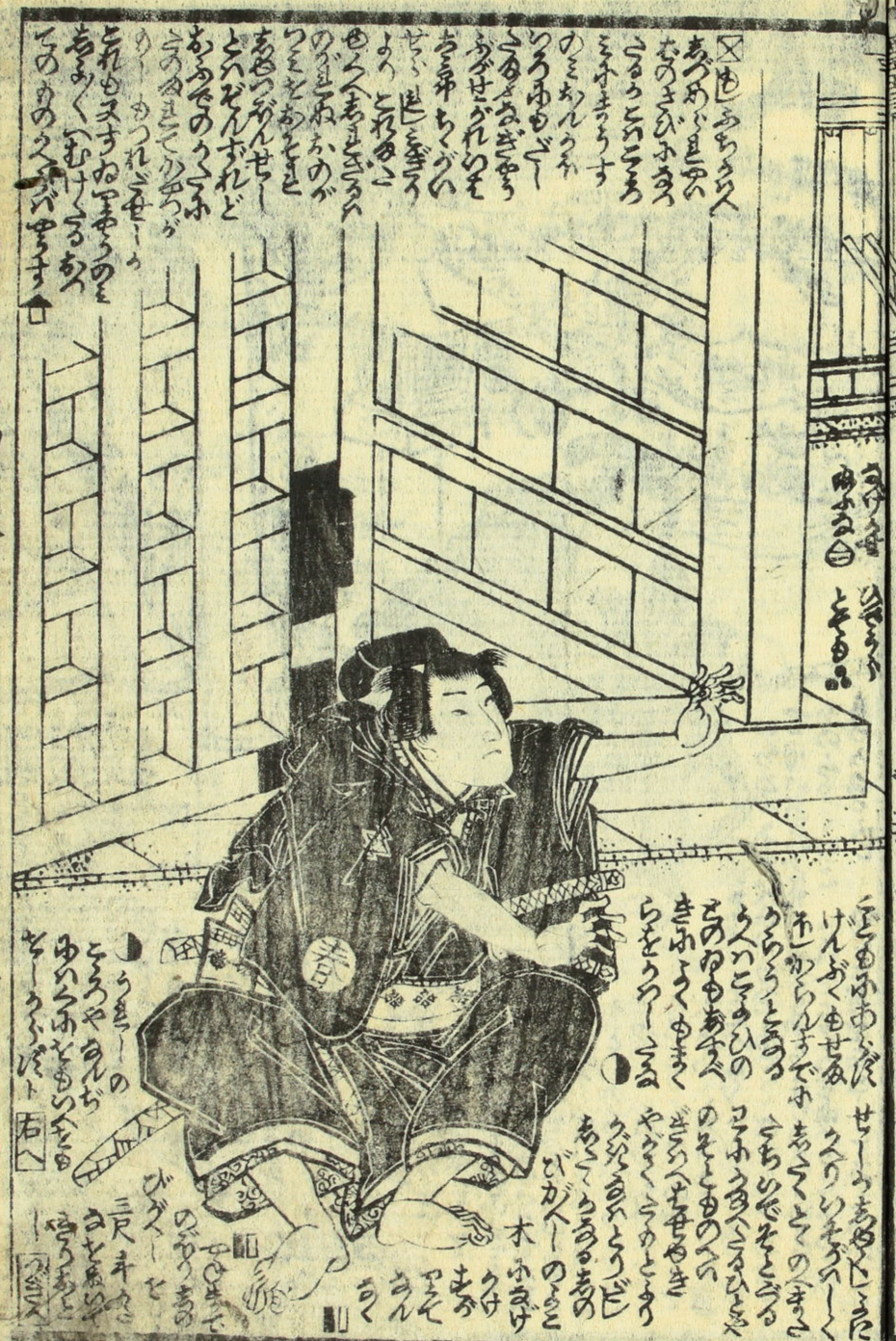
こゝろうろにひとふいあゝぬ

こゝろうろにひとふいあゝぬ

こゝろ



三の巻



春

◑きくけもきまふことをやめがよふけてのかへるかとこえくるふうりこのまをんあらうれそもけつさいうれそもこれがだんのもとゞこうこのこあのまのかとゆぎろてひきりどゞまのとゝろうひばしくこうゞゝまーてゝりくゞゝどまきこてつくもやくのゝゞれゝろゞゝろゞとまゞゝろゞどこてとゞこゝりどこゝゝちにあをやきてそゝをつきゝりゝあーをそゝやゝくゝゞげさまゞまこゞをそ五くゝゝこゞちくゝゝゝあつてくうきそこゝ

▲きりぬゝぞうとこをるくひゝゝひくゝまとこゞのきうくうくゝれあゞゞーきゝゝをさゝまゞゞゝひくけつゝあくゝまのてーひゝこゝのふちやゝらゝきくゝゝくゝまゝーとこうさゝゞゞをあこすとき月ゝまこをちゞふくもゝくされてあくうちゞくゝゝゝ

（四十三べんよう
四十五ゝまでひきつゞき生若はゝるゝられゝとれゝくゝ上ゝ

（傭書交來（
（朝倉伊八刀（

種彦作茅幾画

七草四郎
若菜姫 **志らぬ火**

おなべ火

よみ火傳

四十五編 柳亭種彦作
四十六編
四十七編 恵齋芳幾画

廿八編 假名垣曽文録
廿九編
三十編 朝霞樓芳幾画

二君に仕へぬ忠臣の功
両夫にまみへ賢女の鏡

柳春秋色櫻 近刻

山々亭有人作
恵齋芳幾画

地本草紙問屋 深川佐賀町 **廣岡屋幸助版**